

貌～描かれた近代・撮された近代

明治の訪れ、それは近代という時代に人びとが足を踏み入れた、時代の舞台転換のそのときでした。今月の資料小展示では、当館所蔵史料のうち、「絵画」や「写真」に注目して、そこに「描かれた」、あるいはそこに「撮された」、近代（明治・大正・昭和）のさまざまな「すがた」「かお」「かたち」「ようす」をさぐりだしてみたいと思います。

といっても、新しい時代を描こうとか、撮そうとか意気込んで記録されたものではありません。そこに近代らしいと思われる姿が「ひょっこり」記録されていた、それを探りあててみよう、という企画です。

■「描かれた近代」～絵画史料から

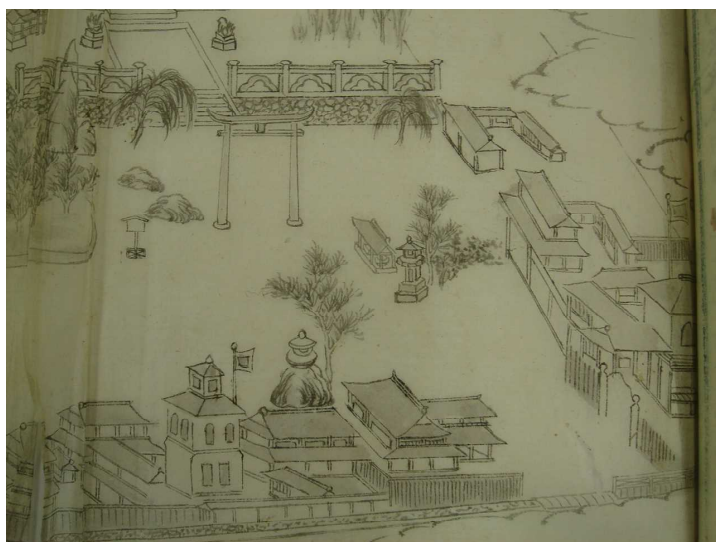
①「山口県山口病院之図 付大神宮・今八幡・八坂神社ノ図」県庁戦前A総務2009



「病院」という近代らしい響きにひかれて史料を手にし てみます。中央に描かれた病院の建屋、「山口県山口病院」と札がつり下げられた門柱を含めた門まわり、玄関の灯具、縦長窓、病院中央廊下の左右に描かれた丸窓に多少の目新しさを感じとることができます。病院前の往来には、洋服姿の人物や人力車が描かれています。

県病院は熊本・高知・栃木・福岡等の県立病院長を歴任した医学士三浦省軒（東大医学部第一期卒業生）を院長として招聘、明治16年（1883）4月に八坂神社境内に仮設置、翌年3月、八幡馬場（現山口赤十字病院の場所）に新築移転されました。移転当時の病院の様子が描かれているものと思われま す。

②八坂神社境内図（「古社寺取調書 吉敷郡神社の部」県庁戦前A社寺124）



明治28年（1895）の八坂神社境内地を描いたものです。旗を掲げた建物を2棟確認できます。図面中の旗は、いわゆる西洋建築（擬洋風建築）であることを示したサインなのでしょうか。どちらの建物も二階に丸窓が描かれています。

左手の建物は明治20年代前半に建築された旧松原写真館（県指定文化財）。二階建で塔屋を載せています。建物の高さこそが新時代の象徴でした。高さへの憧れ。「スカイツリー」や「あべのハレカス」、今日も高層建築が時代の最先端の象徴なのです。右手の建物は松原写真館と同時期に新築された菜香亭の洋館。山口で最初に西洋料理を供した店です。「洋館・写真・西洋料理」、ハイカラなブレンドに人びとは新しい時代の訪れを実感したのでしょう。

③昭和初期、滝部村八幡宮の周辺（「県社以下神社」〈昭和3-5年〉県庁戦前 B 666



昭和4年（1929）の村社八幡宮の郷社昇格

申請に添付された豊浦郡滝部村の様子を伝える絵図です。

八幡宮石段下には、大正13年（1924）、地元出身の「東洋の化粧品王」中山太一が寄付したと伝えられる旧滝部小学校本館（県指定文化財）の塔屋。また、大正14年開通の小串線（現山陰本線）滝部駅、給水塔・信号機、疾走する汽車や自動車。それぞれ地域の近代化の象徴として描かれています。

④明治の小郡の風景（「古社寺取調書 吉敷郡神社の部」県庁戦前 A 社寺125）

●左）中領八幡宮を望む〈展示ケース【下】〉

●右）中郷八幡宮からの眺望〈展示ケース【上】〉



明治28年（1895）当時の小郡の光景です。山陽道や石州街道に沿って建物が軒を連ねています。神社や寺院以外には大きな建物は見当たりません。小郡の東側の玄関口東津橋（藩政時代には米蔵が置かれていた場所）や榎野川河口の山口湾には帆を掲げた和船の姿が描かれています。明治になったとは言え、目の前のすべてがいきなり近代化したというわけではなく、むしろ、それまでと同じ身の丈に合った世界観がそこには漂っているように思われます。この光景が激変したのは明治33年の山陽鉄道延伸時点であったと思われます。

ちなみに中領八幡宮と中郷八幡宮の祭神はともに宇佐八幡宮から勧請されたと伝えられています。中郷八幡宮の楼拜殿は、名工竹田番匠の手がけた応永28年（1421）の建物（棟札による）でしたが、特別保護建造物指定を目前にひかえた明治45年に焼失してしまいました。

⑤中関村厳島神社境内付近見取図（「神社一件 明治31年」県庁戦前 B 690）



中関村田島の村社厳島神社境内制札設置申請書に添えられた境内見取図です。鳥居脇に描かれたソテツが印象的です。境内地前面には瀬戸内有数の入浜式塩田としてその名を知られた三田尻塩田が広がっていました。繁栄の様子は「大正広重」と称された吉田初三郎の鳥瞰図「日本第一の製塩地中関町」（昭和3年〈1928〉）にもきらびやかに描かれています。

絵図に注目すると、「入川」（塩田内にはりめぐらされていた水路）、「大浜」（三田尻塩田内の主要な塩田〈三田尻六力所浜〉のひとつ）の文字を確認できます。海上には帆をあげた和船の姿も見えます。

■ B. 「撮された近代」～写真史料から

写真の場合、近代以降のものがほとんどであり、全体に近代の様相が詰め込まれた貴重な資料と言えるのかもしれませんが。撮影意図（何を撮そうとしたのか、誰が依頼したのか）、撮影者（写真師は誰か）に加えて、撮影場所などを注意深く観察するとさまざまな発見があり、楽しみに満ちた史料です。その携帯は、「写真帖・絵葉書・雑誌の口絵・新聞記事」など多種多様です。

なお、当館所蔵の写真帳の一部はホームページのデジタルアーカイブ「近代刊行写真帳類」として公開されています（「防長名蹟」「防長農業図譜」「県印刷事業創立十周年記念写真帳」「山口県庁舎及県議会議事堂落成記念帳」「大正天皇皇后行啓記念写真帳」「山口県会紀念帖」）。

⑥明治末期の光景（「防長名蹟」〈明治41年〉文書館図書290



近代日本の姿をイメージするとき、写真上左の小野田セメント会社のように、「富国強兵」の時流に乗って急速な工業化が進んでいたかのような印象にとらわれてしまいがちです。しかし、現実には写真上中（室積湾で風待ちのための碇泊した帆船の光景）、写真上右（屋代島安下庄の光景。島影の近代的な構造物〈防波堤〉の内側に碇泊した船もあれば、砂浜に引き上げられた船の姿も確認できます）のような前時代的とも言える光景も目撃できます。

⑦下関長府覚苑寺境内「防長孤児院」（諸家文書美祢市河崎家1260）



近代社会においては、貧困による孤児棄児への救済のための民間篤志家による慈善事業が繰り広げられていきます。写真は長府覚苑寺住職進藤端堂により明治33年（1900）に設立された防長孤児院の様子を伝えるものです。

慈善事業の積極的な展開のためには財源確保が必要でした。慈善事業の先駆けとして知られた石井十次による岡山孤児院の経営手法が各地で模倣されました。慈善市での物品販売、慈善演芸会開催による木戸銭徴収などが代表的です。

左の写真は、県内各地の名望家から寄付金を募る際に、慈善活動の実態を伝えるために撮影された写真です。境内地に設けられた運動場の光景が写し取られており、介助にあたった人びとや子どもたちの様子をうかがうことができます。

⑧祐綏神社〈周南市徳山〉(「県社以下神社 大正4年」県庁戦前A社寺194



祐綏神社は、徳山藩初代藩主毛利就隆と9代藩主元蕃を祀った神社です。写真は、大正4年（1915）の県社列格申請書に建築図面とともに添付されたものです。

撮された社殿の場所は、現在の徳山動物園の場所にあたり、昭和20年（1945）の空襲で焼失してしまいました（のちに再建）。和装の神社関係者に加え、鳥居の左手には、当時の徳山毛利家当主元秀と思われる洋装の人物の姿を確認できます。

写真台紙には、「周防徳山 T.HAYASHI」の刻印を確認できます（昭和を代表する写真家林忠彦の生家林写真館）。

⑨滝部村八幡宮に奉納された軍艦写真（「県社以下神社」〈昭和3-5年〉県庁戦前B666



昭和初期の滝部八幡宮に奉納された額装の軍艦写真です（「撮す」③参照）。八幡宮を管理していた阿川毛利家当主揮毫による安永期の額のかたわらに、「西比利亜戦役記念」として軍艦の写真を収めた額が押し込められるように掲げられています。

大正中期、革命により国力が弱体化していたロシアへの干渉戦争に、日本は世界の列強とともに参陣しました。出兵の武勇勲功をたたえる意味から、地元の鎮守に奉納されたものと思われます。

社殿や鳥居、塔を載せた滝部小学校など、合計17葉の写真が残されて、昭和初期の神社景観を今日に伝えてくれる貴重な資料です。

⑩昭和初期、綾羅木浜の光景（「中山神社絵葉書」〈昭和6年か〉文書館図書726-58



中山神社は、幕末の公家中山忠光を祭神とする神社です。現社殿が造営され、県社に列格されたのは昭和3年（1928）のことでした。

明治神宮造営に倣って、社殿新築には地元の青年団が動員されました。頑丈なコンクリート基礎が築かれており、当時のセメント業界紙にも模範的な建造物として取り上げられています。

写真は社殿新築記念で発行された絵葉書一枚です。神社付近の景観が撮されている唯一の写真です。

中山神社の西方、響灘に面した綾羅木浜は、下関近郊の屈指の海水浴場として知られていました。松原の向こうには砂浜が、そしてその先の海面には、煙をたなびかせて航行する汽船の船影を確認できます。

明治政府としては、一足飛びに近代国家の仲間入りをなしえたつもりでいたのかもしれないのですが、「撮す④」で紹介した明治28年（1895）の小郡の景観に象徴されるように、人びとの眼前の光景の変化は緩やかであったということではないのでしょうか。

絵葉書

B 6 5 2 大井彦島

(展示パネル解説〈シート13補足〉)

耳を澄ませば聞こえてくる！史料にひそむ近代の音あれこれ

■写真1「波と船の音」

「秋穂二島村朝日山真照寺位置図」 〔「明治28年古社寺調査」戦前A社寺123〕より
秋穂美濃が浜沖の海景色。瀬戸内の青い海、遠く豊後の山容まで描きこまれている。
おだかな波間、帆を張った和船の向こうに汽船の煙りがたなびく。

■写真2「ダム」の音」

「向道ダム」 〔「錦川利水工事記念写真帳」山口市山本家文書11〕
昭和15年10月に竣工した向道ダムは、「洪水調節、水力発電による電力増強、工業用水の安定的な供給」などの機能を果たすべく建設された多目的ダムとしては「国内現存最古」とされる。
写真は完成目前（昭和15年8月）の初放流の様子。勢いよく滑り落ちる水が発する轟音が聞こえてくる。

■写真3「せめぎあう音（自然と人と）」

「工事中の惣郷川橋梁」 〔「萩線建設概要」三村家文書3〕
打ち寄せる日本海の風波、水無川河口の沼地、悪条件に立ち向かった難工事を経て、昭和7年、惣郷川橋梁が竣工。須佐－宇田郷間が結ばれ、ここに山陰本線は全通した。
鉄道による全国ネットワークの完成へのみちのりは土木技術進歩の歩みと軌を一にする。
日本海の波音と重なり合う鉄筋コンクリートの打設音。自然と人智が「せめぎあう」音でもあった。

■写真4「万歳の声」

「松崎尋常高等小学校」 〔「(大正天皇皇后)行啓記念写真帳」剣持家文書512〕
大正11年(1922)3月、大正天皇の病氣快癒を祈願のため九州宗像大社に向かった貞明皇后は、その途上、三田尻毛利公爵邸に立ち寄り、宿泊された。毛利邸から三田尻駅に向けて出立された皇后陛下。日の丸を手に整列した教師や児童のお見送りの「万歳」が校庭に響き渡った。

■写真5「演説の声」

「田中義一首相演説」〔行政資料＊戦前内務部164〕

昭和2年4月の首相就任後、田中義一「お国入り」の際の山口県庁における演説。

10月22日、机や椅子を取り払われた県会議事堂の議場には、威儀を正した県庁職員が一堂に会していた。演壇にのぼった田中義一の声が響き渡った。

■写真6「激励の声」

「県庁職員出兵壮行会写真」〔久幸虎雄文書374〈昭和12年7月20日〉〕

県庁内で催された戦場に向かう県庁職員の壮行会の様子。

上座付近に掲げられた人名、はりめぐらされた万国旗。

会場で飛び交ったのは、勇敢な言葉や激励の言葉のみだったのだろうか。

■写真7「職場の音①」（印刷）

「山口県印刷所」〔「県印刷事業創立十周年記念写真帳」一般郷土史料B78〕

山口県印刷所に設置された印刷機械の写真（大正初期の様子）。

防長新聞社の社史などによれば、10年程度のサイクルで新型の印刷機材が購入されていたようである。時代とともに印刷刊行物の数量も増えたことから、印刷機械の奏でる機械音もにぎやかになっていったのであろう。写真帳タイトルや発行年度(大正2年〈1913〉)から推測すると、「山口県印刷所」は、明治30年代後半には稼働していたと思われるが、県庁の組織でありながら、その実態を示す記録を見いだせていない。印刷にまつわる情報の探究は今後の課題である。

■写真8「職場の音②」（電話交換）

「徳山郵便局電話交換室」〔「徳山郵便局新築記念絵はがき」雨村家文書266〈大正12年発行〉〕

大正11年（1922）に新築された徳山郵便局局舎内に設けられた電話交換室の様子。

電話機の音や交換手の声が聞こえる。電話交換手は、モボモガの時代にあってはカフェーの給仕などとともに社会進出を始めた女性のあこがれの職種であった。

大正13年には下関にも郵便局電話課庁舎が建てられた。モダンな建築様式にまとったハイカラな外観、防火装置も備え付けられていた最先端のオフィスビル。内部には休憩室も設置されており、交代業務をとこなう女性職員への配慮をうかがうことのできる「やさしいオフィス」でもあった。現在は「下関市立近代先人顕彰館田中絹代ぶんか館」として再生活用されている。

■写真9「音と絆」（サークル活動）

防長音楽協会発会式記念音楽会写真〔劔持家文書584〕

昭和10年4月25日、都濃郡で結成された音楽愛好家のサークル記念演奏会出演者の集合写真。

和装と洋装が見える。邦楽とともにモダンな楽曲も奏でられたのであろう。

■写真10「防長精神の音」

王政復古七十年記念絵はがき（袋） 〔文書館図書726-54〕

昭和11年12月の亀山園での先賢慰霊祭を中核とした「王政復古七十年」記念行事の一環で作成された。萩城・毛利敬親・防長先賢堂の絵はがき3点がセットになっていた。絵はがきに同封された解説文によると「表紙は錦の御旗の軍歌にして京都尊攘堂に蔵する都風流トコトンヤレぶし原板に抛りたるものなり」とある。

■写真11「校歌」

「山口県立山口高等女学校創立卅周年記念絵はがき」 〔雨村家文書330〕

昭和3年、山口高等女学校の創立30年記念式典で披露された校歌。作曲は東京音楽学校教授信時潔、作詞は、山口高等女学校の国語教師白上貞利である。白上は広島師範学校の指導を仰ぎながら、文芸部の活動で山口地域の方言調査に取り組んでいる。「音霊」に「言霊」を託すためには、歴史・風土に加え、言葉に関する豊かな知識とセンスが不可欠な素養であったと考えられる。

■写真12「チャリティーの音」

「山口育児院慈善演芸大会プログラム」 〔河野家文書513〕

明治後期、孤児・棄児への対応として民間の篤志家による慈善事業が手がけられていった。

その全国的な先駆けとして知られるのが、石井十次による岡山孤児院の活動である。

大原孫三郎やライオン歯磨からの支援もあったが、全国各地で慈善会を開催して、その入場料と寄付収入を事業資金とした。山口孤児院は、明治37年（1904）、洞春寺住職荒川道隆により設立された。

岡山孤児院の運営スタイルを模倣して、慈善演芸大会を開催した。

写真は、防長孤児院が明治38年10月に山口町中河原の永楽座で三日間にわたって開催された慈善演芸大会初日のプログラムである。演目からも、さまざまな「音の響き」を聞き取ることができる。

